源流の四季

第22号（2006年6月）夏
Summer

発　行　所／多摩川源流研究所　〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村4383
TEL 0428（87）7055　FAX 0428（87）7057
http://www.tamagawagenryu.net
E-mail:genryu@mxa.cosmo.ne.jp
発行責任者／中村文明
協　　力／多摩川源流協議会（甲州市・奥多摩町・丹波山村・小菅村）
多摩川源流観察会
印　　刷／（株）サンニチ印刷

初秋大菩薩（撮影：中村文明）

Contents 目次

東京電力森林再生セミナー開催……2〜3
源流塾・源流百年の森づくり……4
JT・ホンダが企業の森……5
多摩川づくりへ七つの提言……5
シリーズ 水源林の歴史 第1回……6
源流秋のイベント紹介……7
第7回 全国源流シンポジウム……8

東京電力が森林再生セミナーを開催

三月十八日、渋谷区の東京電力館において東京電力主催の「森林再生セミナー」が開催された。このセミナーで東京農業大学の宮林茂幸教授が行った講演内容を紹介する。

「森と暮らしと地球温暖化」

東京農業大学教授　宮林茂幸

講演する宮林教授（3月18日東京電力館）

日本は世界有数の森林国

今日のテーマは「森と暮らしと地球温暖化」です。森と人がどういう関係を築いてきたのか、森とどうやって心を通わせてきたのかを中心にお話ししたいと思います。まず最初に世界の森林と我が国の森林を比較してみました。世界の森林は地球の約三割に及んでいます。日本の森林面積は国土の65%です。森林の面積が国土の六割を超えている国はカナダ、フィンランドの次に日本が多いんです。日本は世界有数の森林国です。しかし、国民一人当たりにすると0・25haで貧林国となります。

日本の森林の特徴は人工林率が非常に高いわけです。その背景には、昭和三十年代の初めまで、私たちは森林資源をエネルギーや農業や生活の資材など色々な形で活用してきましたが、残念ながらエネルギー資源が山から電力や化石燃料に移ったのです。すると、森林の利用が日々の暮らしから遠ざかってゆきました。そこで国は木材生産を中心とする政策に転換し、国土の40%に及ぶ人工林を造ってきたわけです。この40%の森林はいま材を収穫できる森林に成長しているはずですが、なかなか伐れない。スギの価格は外材よりはるかに下がっているのに国産材が売れないのは何故か。

これには理由があります。ちなみに三十年前の一立方メートルのスギの立木価格はおよそ一万円していました。最近の東京都のデータですと、一立方メートルあたり二千八百円ということです。ということは、四十年生のスギ一本がどれくらいかというと、搬出費を除けば百円にもならない。大根が四十日で作れるとすれば四十年かけて作ったスギよりも大根の方が高くなる。そうなると採算があわないことから山に人が入らない状況になります。

憂慮すべき世界的な森林減少

今、世界的には森林はどんどん減少しています。この十年間で八千万ヘクタール減っています。一年間ですと八百万ヘクタール減っています。この数字は日本の人工林の八割が毎年なくなっていくことと同じです。一番減っているところは東南アジアの熱帯地域で、この地域は木材を一番使っていて燃料にするためにどんどん伐っています。二つ目は、食料生産のために移動農耕をし、森林で焼畑を行っていくわけです。三つ目には、違法伐採です。熱帯林は胸高直径五十センチ以上の木でなければ伐採できないと国際法で決めていますが、現金収入のために規定より小さい木を伐っています。

ところで日本の森林はこの二十年間減っていません。二千五百万ヘクタールという森林面積は減っていないどころか若干増えています。しかし、手入れをしていないので大変弱い森林になっています。風や雪によって将棋倒しになってしまうような「線香林」になっています。これがどういう問題を引き起こすかというと私達の生活環境に直結する水を安定供給する問題、土砂崩れを起こす問題、河川を埋めてしまう問題、スギ花粉の問題など色々な問題を私達の生活環境の中に引き起こしていきます。早く何らかの手だてを講じなければいけないのが日本の森林の現状です。

植物は特別な物質を発散して身を守る

最近はフィトンチッドなど「癒す」働きが注目されています。森林や

植物はテルペン物質を常に発散し、自分たちに群がる菌を殺しています。動物は逃げたり、危害を加えたりして身を守りますが、植物は特別な物質を発散して身を守っています。森の中に行けば五十種類あるといわれているテルペン物質を浴びることができますし、深呼吸すれば吸い込むことができます。そうするとテルペン物質によって私たちについた雑菌をうまく消毒することになります。

むかし、寿司屋に行くとネタを保存する場所にサワラやヒノキが入っていたのはこの効能を活用して殺菌していたのです。お赤飯を南天の葉でおおったり、ちまきを作ったりするのも同様です。日本に生きる私たちは森林から恩恵を得て文化を創ってきました。そこに森林と人間が共生しコラボレーションする技と能力が生まれてきていました。源流地域の生活の知恵は森との共生から培われてきたわけです。

木を使うことで森林を守る

森林と人間には非常に多様な関わりがあったのですが、その中の最大の関わりは木を使う文化だったと思います。日本では伝統的に木を使うことによって山を守るというメカニズムができていたわけです。そのような中で木を使いすぎて山を荒らすことがしばしばありました。ところが今日は、木を使わなすぎて、木を伐らないことで山を荒らす結果になっているわけです。

私がいいたいことは山を守るためには木を使いましょう、木を使うことが環境を守り、森林を守るということです。20世紀は大量生産、大量消費、大量廃棄をすることによって経済が動くという仕組みでした。しかし、その中で環境問題にぶつかりました。生産が増えれば増えるほど環境を壊していくという問題にぶつかりました。そこで私たちは生産をする中で環境を意識した生産をしなければならないし、環境を意識した生活をしていかなければならないという課題が発生しました。

環境に責任を持った生産と生活に移行する

資本主義社会ということで社会は発展しましたが、これからは環境資本主義社会ということで、環境に責任を持った生産と生活に移行していかなければならない。21世紀は循環社会の時代であるがその社会をどうつくるか。自分たちの生活において環境を意識するとともに次の世代にいい環境を残していく責任がある。子どもや孫につなげていく環境を今考えなければいけない。今のような生産力展開を進めていけば、大変なしっぺ返しを食ってしまう。

こうした社会の転換期に小菅村や多摩川源流研究所が中心となって源流再生運動がスタートしました。森林を再生する、源流景観を復元する、源流文化を再評価するなど自然に学び自然と共生する資源循環型の里づくりが目標です。

この動きに連動して、平成十六年、環境省、国土交通省、林野庁、文化庁などが省庁連携して「源流再生・流域単位の国土の保全と管理に関する国土施策創発調査」を実施しました。国が源流に着目して源流資源の再生化を図るプロジェクトを開始したのです。

その全国のモデルになったのが多摩川源流の小菅村です。何故、多摩川源流なのか。それは、小菅村と多摩川源流研究所の活動があったからです。村と源流研究所がこつこつと源流資源の価値と可能性を探求してきました。また、全国の源流と連携するため、北海道、関東、中部、近畿、九州など全国の源流を駆けめぐって、全国源流ネットワークを形成してきました。地元の本物の価値を探求するこの間の努力と実績に国が光を当てたのです。

再生可能な森林資源の持続的保全を

その国土施策創発調査で得られた成果を実践しているのが、多摩川流域なんです。多摩川の上中下流を一体的に流域圏ととらえ、その流域圏にある様々な資源をみんなで守っていこう。流域の象徴である源流の自然や文化、歴史などの資源は流域社会の共通財産である。その財産を流域社会全体で守り育てていく仕組みや組織を今から構築していこうという取り組みです。

もう一つは、緑のボランティア活動の推進です。林野庁も国民参加によるボランティア運動を展開しております。市民や専門家、学識者、自治体、企業など色々な分野の人々が参加し連携して、国民の多くに森林に関心を持ってもらい、森林を守っていく仕組みを育てていくことが日本の森林を守る重要なポイントとなっているからです。

さらに、最近注目されているのが、企業によるCSR（企業の社会的責任）活動です。森林などの国民的な共通財産を守り、次の世代に伝えていこうという企業の新しい動きです。嬉しいことに、東京電力が多摩川源流の小菅村・多摩川源流研究所が取り組んできた森林再生森林プロジェクトに注目し、自らも多摩川源流自然再生協議会に参画し、地球温暖化防止・二酸化炭素の吸収固定化を目的とした持続可能な森林保全活動を小菅村で開始しました。これから日本が世界から本当に信頼されるためには、健全な循環型社会のモデルを日本で育てることです。その資源の源は再生可能な森林資源です。その森林資源の宝庫である源流をどのように守っていくかをみんなで考えていきたい。産地直送を売りとした源流の木で家を造る活動が始まろうとしています。大変注目すべき試みです。森林や自然あるいは人間社会全般を冷静に捉らえ直していくことが今求められているのです。多くの皆さんが参加して日本の健全な森づくりを一緒に進めていくことを最後にお願いして私の話を終わらせて頂きます。

源流の自然と文化に感動！
源流塾を開催

森と共に生きる道筋を探る「源流塾・多摩川源流百年の森づくり」が、五月二十七、八日の二日間の日程で開催された。第一回源流塾には十七名が参加し、牛ノ寝通りの松鶴のブナの周辺の林相調査を実施し母樹としての保存を図るビジョンを検討するなど源流・百年の森づくりへ第一歩を踏み出した。

第1回源流塾（5月27日、小菅村役場）

森林の持続的な保全策を探る

源流塾の開校式では、小菅村の廣瀬文夫村長が「多摩川源流自然再生協議会を中心に、今年から源流・百年の森づくりが開始された。この取り組みを推進する仕組みの一つが源流塾である。みなさんの理解と協力で新しい小菅村の歴史を切り開いていきたい」と歓迎の挨拶を行った。続いて、東京電力環境部の矢野康明マネージャーが、「暮らしと森の関わりを復活し、森林の持続的な保全を図る取り組みをみなさんと一緒に創造していきたい」と源流塾の共催者の立場から挨拶した。

林相調査（5月28日）

源流学講座では、「源流・百年の森づくり」をテーマに東京農業大学の菅原泉助教授が、「水循環と源流」をテーマに法政大学の神谷博講師が、「水と文化」をテーマに作家の丹治富美子先生が、「日本人の自然観と源流」をテーマに源流研究所の中村文明所長が、それぞれ講義した。

丹治先生は、群馬県で行われた国民文化祭で水の神様をテーマにしたオペラ「みづち」を上演したことに触れ、「みづちとは水の精を表すもので水に困った下流に住む若者がその原因を探すために川の源流を訪ねる物語で、水の大切さを訴えている。自然を見ること、自然の声を聞くこと、自然をありのままに感じることを体感してほしいと願っている」と語りかけ、「山桜散りいそぐ枝に　鳥のきて　悲しみてなく」という詩を紹介し参加者に感動を与えた。

夜の交流会では、加藤亀吉組合長が、松姫峠のエピソードや小菅村の百年の木に関する歴史や文化を紹介し、「新月伐採すると木が腐らない。木の生長が止まっている時切るのが一番いい。山の藤や竹も冬切ると腐らない」と自然の摂理にあった暮らしの知恵や技を披露した。

源流塾二日目は、牛ノ寝通りの松鶴のブナの周辺の林相調査を実施し、母樹としての保存を図るための基礎データを収集した。現場では、中村所長が「このブナを何故松鶴のブナと呼ぶのか」とその背景と由来を紹介、続いて樹木医の笛木祐二さんが松鶴のブナの健康診断のポイントを紹介、木の樹勢、木の樹形、葉の量と大きさ、枝先の具合、幹の損傷の程度などを総合的に診察して松鶴のブナが健康であると診断した。

林相調査の指導に当たった菅原先生が、全木調査の方法と要領を分かりやすく解説。参加者は四班に分かれて松鶴のブナの周辺を詳しく調査した。調査によって母樹として保存するためには、ブナの根を傷つけない方策が必要なこと、枝に添え木がいることなどがわかった。

巨木「松鶴のブナ」の下で思う
（第1回源流塾に参加して）

土岐　臣道

昨年まで参加していた「緑のボランティア」が今年は無くなった。さびしい限りだ。新しく「源流塾」という体験講座を開くようだが、勉強より労働が好きな僕にはなんだか敷居が高い。

まず「源流塾」たるものの内容が今ひとつよく分からない。案内書を読むとなにやら古道のことを学ぶようで、森で汗を掻きたい僕の路線とは違う。今年は遠慮しようと思っていたが、話を聞くと「百年の源流の森づくり」の構想になんら変更は無く、源流の森を再生していくための調査方法を、森の中で体験しながら学んで行くと言う。

ならばとザックに雨具を放り込んで小菅村に向かった。車内で青木さんに会い、奥多摩に着くと桧垣さんがいて、佐藤さんがいた。既にふるさとへ帰った気分だ。

役場へ着き開校式が始まる。中村所長、菅原先生の他に新講師として東電環境部の矢野マネージャー、法政大学の水流のスペシャリスト神谷先生、森の歌人で作家の丹治先生が加わった。百年の森作りの強力な助っ人だ。いよいよ森が動き出した、と思わせるそんな開校式だった。

午後は雨のため予定が変更になった。小雨の煙る松姫峠から霧に霞む牛ノ寝ハイキングコースを「松鶴のブナ」の巨木を目指して歩いた。菅原先生から木々の名前の説明を聞きながらの散策だ。31種の説明を受けたが、覚えられたのはハウチワカエデ、ヤマボウシ、マンサク、ツガ、ミズナラ、ハリギリの6種のみだった。

翌日は朝から雷雨。しかたなく箭弓神社にて樹冠投影図の作成方法を学んでいると、雨が上がり新緑が輝きだした。調査地へ向かう。目指すは「松鶴のブナ」の巨木の下だ。現地で4班に別れてさあ作業開始だ。樹木の名前、位置、胸高幹周り、樹冠の中心とその大きさや形、等々を図面に落としてゆく。「キョウコウ・ジュウニセンチ」「ロクジノホウコウへ・サンメートルハチジュウ」等の声が飛び交った。森の中での作業は楽しい。あっという間に時間は過ぎた。これはまた次回も来るしかないと「松鶴のブナ」の下で思った。

感ジタコト、思ッタコト

JT・ホンダが「企業の森」づくり

ミズナラなどを植樹

地球温暖化防止が大きな社会問題になっている中、企業の社会貢献活動として森林保全活動が活発化している。小菅村には、JT（日本たばこ産業）とホンダ自動車がこの春相次いで訪れ広葉樹を植林するなど、森林保全活動を展開した。

JTは、五月二十日、西沢省吾副社長をはじめ社員百七十名が参加して、鶴峠周辺の村有林にミズナラ、コナラの苗木六百本を植樹した。JTは、三月に小菅村と締結した協定書で「植林及び育林活動を実施することにより、森林環境の保全に貢献するとともに、地域社会との交流を実施することにより地域の発展に寄与する」ことを謳っており、今後五年間「森林保全活動」を継続する計画。

ホンダ自動車は、四月十五日、社員四十名が参加して、第三回「ホンダ小菅村森づくり」活動を実施した。当日は、小菅村や北都留森林組合の指導のもと、ミズナラやケヤキ、ヤマモミジの苗木約五百本を植樹した。参加者の中には、三回連続で植林ボランティア活動に参加している社員も現れ、「小菅村は空気も水もうまいし人情も厚い。いい汗かいて元気になる」と植樹活動の感想を話していた。

JTの親子森林保全活動（5月20日）

□ 多摩川施策推進に向け七つの提言 □

多摩川がもっと近くなる

川崎市は、総合的な政策能力を身につけた職員育成を目的とした政策課題特別研究事業を実施しており、その十七年度政策課題成果発表会が五月二十二日、川崎市砂子会館で行われた。

十七年度政策課題研究の一つは、「多摩川に関する総合的施策推進に向けた七つの提言」。

当日はチームリーダーの港湾局計画課の山本一滋さんが、「多摩川と市民が固く結ばれた新しい関係を作り上げるための、多摩川に人々をより近づける具体的な提案」として「多摩川がもっと近くなる」をテーマに七つの具体的な提言を紹介した。

続いて多摩川分科会は、多摩川に面した幸区の船着場を会場に、コーディネーター・法政大学の小島聡教授、パネリスト・中村文明源流研究所所長、鈴木真智子NPO法人多摩川エコミュージアム理事、斎田紀行京浜河川事務所河川環境課長、萩原哲川崎市環境局緑政部参事らによるパネル討論が七十名を越える参加者を得て行われた。

研究チームによる七つの提言の柱は次の通り。

□多摩川の顔づくり □イベントでゴミ拾いをしよう！ □流域マップで市域をつなぐ □源流へ行こう □幸区船着場・賑わいの創出 □等々力・市民ミュージアム □二ヶ領せせらぎ館・市民協働による環境学習のメニュー開発

多摩川分科会（5月22日）

好評！源流クラフトデザイン教室

ゆうゆうクラブの達人が学生たちを指導・援助

講評する陣内教授（5月21日）

源流研究所は、五月十九日～二十一日までの三日間、法政大学大学院工コ地域デザイン研究所の陣内秀信教授や神谷博講師の協力を得て、源流クラフトデザインワークショップ（河川整備基金助成事業）を実施した。この取り組みは、今多摩川源流域で検討が進められている源流大学設立準備のモデル事業として企画されたもの。

当日は学生や社会人など十二名が参加し、神谷先生や小菅村のゆうゆうクラブの会員、大工さんの指導を受けながら源流の木や木帯などを利用して「初湯のヒノキ風呂」「木目の灯」「源流帽子」「ぬくぬく」「丸太郵便」「鐘」などの作品づくりに挑戦した。

最終日には、生徒一人一人がゆうゆうクラブの会員にクラフトデザインの成果を発表し、参加者から大きな拍手が送られた。講評を行った陣内教授は「それぞれの作品は、新鮮な感覚で作られており、源流の木に新しい命を吹き込んでいる。目標、プログラム等企画が明確で指導力があると短時間でもこれ程までに豊かな成果を生み出せることを知って驚いた。また、地元にこんなに多くの指導者、協力者がいることも思いもよらなかった。源流大学の内容、運営のイメージも膨らみます」と語っていた。

参加した学生は「まずはじめに地元の方々に大変感謝したい。私の無理難題な要求をいやな顔ひとつせず叶えてくれたし、暖かい言葉をかけてくれた。小菅村では新鮮で新しいことの連続だった。初チェンソー、初カゴづくり、初ヤマメ・イワナと『初だらけ』の毎日だった。この体験は大変貴重な体験となり私にとってかけがえのないものとなった。」と感想を寄せた。生徒たちが作成した作品は、小菅の湯の玄関広場に展示されている。

シリーズ 水源林の歴史

第一回

東京都水源林経営の始まり

元東京都水源林管理事務所
奥多摩出張所長
堀越　弘司

多摩川源流の豊かな森（東京都水源林）

江戸の水源多摩川

東京、当時の江戸の水源河川として多摩川が登場するのは、それほど古いことではない。徳川幕府が、当時の江戸の爆発的な人口増加に対応し、多摩川に水源を求めたのは、承応二年、二六五三年のことである。

玉川上水と呼ばれる用水路の建設は、羽村取水堰（東京都羽村市）から現在の四ッ谷までの約四十二キロを一年四ヶ月の歳月を要して翌年の承応三年に完成した。

それ以降、江戸・東京における多摩川の重要性は、昭和三十九年に利根川からの取水が始まるまでの間、高まり続けた。

徳川幕府の権威がまだ健在の頃は、上流域の森林は、幕府直轄の森林として、また、鷹の幼鳥を捕るためのお巣鷹山として、手厚く保護されていた。しかし、幕末における幕府の権威失墜と明治維新後の林政の乱れを背景とした盗伐、焼き畑、そして森林の官民有区分に際し、一時入会慣行を停止したことへの反抗のための放火などにより、さしもの美林も荒廃の一途を辿った。

最も荒廃の激しかったのは、多摩川最奥部の花崗岩の深層風化地帯（現・山梨県甲州市塩山）で、この地質特有の緩やかな地形が焼き畑を容易にし、脆弱な地質が森林消滅による荒廃を助長した。

この上流域の森林荒廃は、玉川上水の取水に濁水や渇水といった形で影響を与えることになった。これに危機感を持った当時の東京府が、上流域の森林の調査を実施した。調査は、東京帝国大学の林学博士であった本多静六教授に委託され、明治三十三年、一九〇〇年に実施された。

水源林経営を開始

この調査後、本多教授は、「水源地の森林状態は甚だ危機に瀕しており、その経営を怠れば、東京市の飲料水はたちまち欠乏をきたす。東京府下三郡の農地、数千町歩のかんがい用水に不足を生じる。…」と報告し、多摩川水源地の森林を府または東京市で直接経営することが急務である、と答申した。

この答申を受けた東京府は、当時、首都東京の水道事業を担っていた東京市に水源林経営を打診した。しかし東京市は、趣旨には賛同したものの、市の財政基盤が脆弱であることを理由にこれを断った。

このままでは、東京の水道事業の将来に悪影響をもたらすと考えた東京府は、自らの森林経営の英断を下した。これが明治二十四年、二十世紀幕開けの一九〇一年のことであった。

当時の府知事は千家尊福、市長は松田秀雄であり、尾崎行雄が第二代東京市長として水源林管理の歴史の表舞台に登場するのは五年後の明治二十九年のことである。

余談になるが…。

多摩川を遡り丹波山村の六キロほど先の国道脇に「尾崎行雄・水源地視察記念碑」がある。この記念碑の存在と、水道事業の一環としての森林経営に、東京市が始めて着手したという事実から、尾崎行雄市長が水源林経営の始祖と思われている方が多い。しかし、既述のように、実際に、水源林経営を開始したのは、千家尊福東京府知事である。

一時期、水源林事務所（現・水源管理事務所）でも、水源林の歴史を東京市が水源林経営を開始した明治四十三年、一九一〇年を始めとする考え方があった。この事は、現在、十年ごとに策定されている管理計画（経営計画）が、東京市が作成した計画を第一次としてカウントされていることに反映されている。

しかし、昭和五十七年に刊行された「水源林八十年のあゆみ」で初めて、明治三十四年を水源林経営の始期として認知した。そして、二十一世紀の幕開けとなった平成十三年、二〇〇一年、東京都は、水道水源林百周年を地元市町村と共に祝ったのである。

次号から、水源林における森づくりの変遷を記していきたい。

源流の自然と人が待っている
―小菅村・源流研究所イベント紹介

源流塾―百年の森づくり―

源流域の森や文化について学んでみませんか。講師は大学の専門家や地元の古老です。森と生きる知恵を一緒に身につけましょう。

テーマ ③広葉樹の種や稚樹 ④古道再生を学ぶ ⑤古道再生を学ぶ

日時 ③十月十四日(土)～十五日(日) ④十一月十一日(土)～十二日(日) ⑤十二月九日(土)～十日(日)

集合 JR奥多摩駅

費用 二万二千円【学生六千円】(宿泊費・泊四食付・保険料・講義料・その他)

対象 十八～六十九歳の健康な方

定員 各回二五名(参加者多数の場合は抽選となります)

秘境・妙見五段の滝を訪ねて

多摩川源流の秘境にたたずむ妙見五段の滝を見に行きませんか。ガイド付きツアーなので安心です。

日時 八月二十六日(土)～二十七日(日)

集合 JR奥多摩駅

費用 一万五千円(宿泊費・泊四食付・保険料・その他)

対象 六十九歳以下の山歩きに自信のある方

定員 二五名(参加者多数の場合は抽選となります)

源流古道・水源林の旅(Aコース)

多摩川源流域をぐるっと一周する源流古道。そのスタートとなるAコースを一緒に歩きませんか。

コース 松姫峠～大菩薩峠～柳沢峠

日時 九月十五日(金)～十七日(日)

集合 JR奥多摩駅

費用 二万五千円(宿泊費・二泊六食付・保険料・その他)

対象 六十九歳以下の山歩きに自信のある方

定員 二五名(参加者多数の場合は抽選となります)

源流そばづくり体験

そば打つだけじゃ物足りない方へ。種まきから収穫・製粉・そば打ちと本当のそば作りを体験してみませんか。

日時 種まき八月十一日(金)
収穫 十月二十日(金)
そば作り 十一月四日(土)～五日(日)

集合 JR奥多摩駅

費用 一万五千円(宿泊費・保険料・材料代・指導料・その他)

対象 十八～六十九歳の健康な方

最少人数 十名(参加者十名未満の場合実施しませんのでご了承下さい。)

その他 申込者多数の場合は抽選となります。そば粉のおみやげ付。

☆お問い合わせ・お申し込み
小菅村役場源流振興課
電話 ○四二八―八七―○一一一
FAX ○四二八―八七―○九三三

予告 干し柿づくり体験ツアー

今年も干し柿作り体験ツアーを実施致します。柿もぎから始まるツアーで、十一月頃開催予定です。詳細は次号でお伝えします。

☆お問い合せ
小菅村観光協会
電話 ○四二八―八七―○七四一

「東京源流展」開催趣旨

「東京源流展～源流から解き明かす東京水圏の再生」開催が決定しました。源流を〝異なる流域をつなぐ地域〟と捉えた画期的な試みです。詳細は追って報告致します。

対象地域 都区内の湧水も源流と捉える。最源流地域では小菅村(多摩川)、旧大滝村(荒川)、川場村(利根川)などを代表地域とする。また全てをつなぐ水系として東京湾を捉える。

会場 科学技術館(一F十号催事場)

期間 平成十九年一月九日(火)～一月十四日(日)

シンポジウム会場 「東京源流シンポジウム」科学技術館サイエンスホール(定員四百人)

日時 平成十九年一月十四日(日)十時～十六時

第7回
全国源流シンポジウムのご案内(案)

全国源流シンポジウム開催の目的

参加無料

全国源流シンポジウムは、河川の源流域に関わる様々な分野の人々と交流し、源流域の自然・歴史・文化・国土保全に果たす役割を広く議論するとともに、「源流資源は国民的な財産である」ことの理解と共感を広め、より広範な源流ネットワークを構築することを通して、源流域の環境保全や地域づくりに貢献することを目的に開催します。

今回から全国源流の郷協議会と連携し、流域単位の森づくり・川づくり・地域づくりを経験交流し、相互理解と交流を深め、多くのことを学び合い、次の世代にしっかりと伝えていきたいと考えています。皆様の積極的なご協力、ご参加をお待ちしています

第7回全国源流シンポジウムの開催要項

□ **日　　時**　2006年10月28日(土)29日(日)
□ **場　　所**　山梨県小菅村中央公民館及び多摩川源流域
□ **日　　程**　28日　11:00開会　源流サミット　記念講演　パネルディスカッション
□ **挨　　拶**　国土交通省京浜河川事務所　多摩川源流協議会ほか
□ **源流サミット**　全国源流の郷協議会の村長や町長からの発言・メッセージ
□ **朗　　読**　「水の神様　　みづち」　　作　家…丹治　富美子
□ **記念講演**　「今なぜ源流大学か」　　東京農業大学森林政策学教授…宮林茂幸
～源流再生と森林共生社会～
□ **基調提案**　「流域における源流の役割」　東京大学名誉教授…高橋　裕
□ **パネルディスカッション(予定)**
渋澤寿一　　NPO法人樹木・環境ネットワーク協会専務理事
神谷　博　　法政大学講師
矢野康明　　東京電力環境部マネージャー
野村孝雄　　東京都建設局河川部長
久保田勝　　国土交通省河川局河川環境課長
小田博之　　NPO法人全国源流ネットワーク
□ **コーディネーター**　山道省三　　NPO法人全国水環境交流会代表
□ **第二日目**　29日　　水干探訪など多摩川源流の魅力を探る体験型イベント
□ **主　　催**　第7回全国源流シンポジウム実行委員会
□ **共　　催**　小菅村・NPO法人全国源流ネットワーク・全国源流の郷協議会
□ **協　　力**　多摩川源流協議会
□ **後　　援**　国土交通省・環境省・林野庁・山梨県(交渉中)
□ **連 絡 先**　第7回全国源流シンポジウム実行委員会事務局
多摩川源流研究所
〒409-0211　山梨県北都留郡小菅村4383
電話 0428-87-7055 FAX 0428-87-7057(宿泊の申し込み等は源流研究所まで)

※この事業は河川環境管理財団の助成を受けて実施しています。